

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 陳 永福

本論文は、明末清初の時代に士紳によって形成された党社（東林党や復社といったグループ）について、太倉州の名家であった太原王氏を中心として考察したものである。

第一章では、明末万暦年間に内閣大学士をつとめた王錫爵が息子の科挙受験について不正を働いたとして批判された事件を分析する。科挙の不正をはじめ、この時期の官僚が告発を行う場合、内閣などの権力者の悪を暴いたという美名を求め、事実無根のことを述べる場合も多かった。言論統制と見える政策も、その無軌道な告発による混乱を収めることを意図していた。第二章も、王錫爵ら内閣大学士が官僚たちから批判された事例を考察する。これら批判は、実は多く誤解に基づくものだったが、皇帝と内閣とのやりとりの実相を外廷の官僚は知ることができず、皇帝による厳罰措置を内閣の悪政と思いこんだ。

第三章は明末崇禎年間の復社について論じる。復社は東林党の理念を継承すると称したが、実際には栄達のため人脈を求めて加盟した者も多い。復社の中心人物は太倉州の出身で、王錫爵の一家も同じである。王錫爵の孫にあたる王時敏も復社の成員と深いつながりを持っていた。第四章は明末清初の太倉州に生きた陸世儀に焦点をあてる。陸世儀が組織した文社ははじめに修養・学習を行うことでお互いを高め合うことをめざしていた。彼の目には、復社はこれと違って名利を求める者の集まりと見えたため、反感の対象となったのである。第五章は、太倉州をおそった自然災害に際して、地元の士紳がいかなる意図で救済活動を行ったかを論じる。地域社会のよりよい運営をめざす理念のもと、具体的には現実的で柔軟な判断がなされ、それに基づいて地方官の施策も評価されていた。

第六章では、王時敏一族の経済状況が、明清交替の時期に、災害・戦乱・徴税強化によって打撃を与えられた過程を追った。第七章は清初の文社活動と党争を扱う。清初の江南にはいくつもの文社が対立・連合を繰り返した。このような分散化には、士人の結合を嫌う清朝の姿勢が影響していたと考えられる。王時敏の息子王掞は清朝の高官となり、立太子問題について意見を述べて康熙帝の怒りを買ったが、その背景には官僚たちが同調して行動することへの皇帝の警戒があった。

本論文は、大量の漢籍史料にもとづいて士紳たちの行動の動機と人間関係を詳細に明らかにした。そのうえで、既往の研究者が、東林党の主張に依拠し、そこに進歩や正義の理念を読み込んできた観点から離れて、党社の活動についての理解を深めた労作といえる。党社の活動を推進する者たちの理念は何か、ある意図をもって記された史料の記述から実態をいかに読みとるのかなど、まだ検討すべき余地はあるとはいえ、本論文に示された大きな成果にかんがみて、博士（文学）の学位を授与するにふさわしいと判断する。